



誘惑温泉旅館

冬休みのアバンチュール

天草白

挿絵／まひるの影郎

立ち読み版

第1章	憧れの従姉は若女将・魅惑の初体験……………	4
第2章	女子大生は小悪魔系・妖しい誘惑……………	62
第3章	清楚な熟妻の秘密・倒錯の艶遊戯……………	117
第4章	美人OLの感傷旅行・癒しのアバンチュール……………	174
第5章	憧れの従姉は僕の恋人・捧げてくれた肛交……………	233
エピローグ	……………	282

登場人物

Characters

村尾 恵一 (むらおけいいち)

従姉の杏子が若女将を務める旅館に冬休みを利用して遊びに来た十八歳の童貞大学生。頼まれたら断れないお人よしな性格。初恋の相手である杏子への思いを再燃させる。

村尾 杏子 (むらおきょうこ)

バツイチの若女将で、恵一の従姉。勝気で快活な性格の二十七歳美女。黒髪ポブカットに、意志の強い澁刺とした美貌とモデル体型のFカップ巨乳を持つ。

萩原 里香 (はぎわらりか)

卒業旅行で杏子の旅館『むらおや』に宿泊中の女子大生。茶髪ショートヘアの明るく天真爛漫な美人。ぽっちゃりグラマー体型。

篠田 織江 (しのだおりえ)

大和撫子という言葉がよく似合う気品のある顔立ちをした、貞淑な雰囲気の人妻。三十七歳。美乳のスレンダー体型。

川瀬 美紀 (かわせみき)

杏子の高校の二年先輩。艶のあるストレートロングの黒髪をなびかせる、おっとりとした性格の美女。小柄ながらEカップ巨乳を持つトランジスタグラマー。



第1章 憧れの従姉は若女将・魅惑の初体験

「うう、さすがにこっちは冷えるな」

笹蔵温泉駅のホームに降り立った村尾恵一は両腕で自分の体を掻き抱いた。

笹蔵は駅名が示す通り温泉街として全国的に有名な街だ。

半島の北端に位置しており、恵一の住んでいる隣県より数段気温が低い。

「もうすぐ杏子姉に会えるんだ。五年ぶりくらいか……懐かしいなあ」

憧れの女性のことを思い浮かべ、胸のうちが甘酸っぱく疼く。

九つ年上の村尾杏子は笹蔵の温泉街にある老舗旅館『むらおや』の娘であり、恵一の従姉でもあった。幼い頃は夏休みや冬休みごとに互いの家を行き来し、よく遊んだものだ。

恵一にとって彼女は『憧れのお姉さん』そのものだった。

が、年を重ねるごとにその交流は少なくなっていく、今では親戚の法事でもなければ、まず会う機会がない。

「送迎バスが来るって聞いてたけど……まだかな」

恵一が通う大学は十二月の下旬から一月の四日まで二週間ほど冬休みが続く。その期間を利用し、今日から冬休みが終わる前まで『むらおや』に宿泊する予定だった。

杏子の話では、最寄り駅に送迎用のマイクロバスが来るということだ。が、どうやら到着が少し遅れているようだった。

「『むらおや』に立ち寄るのは、子供のころ以来か……十年ぶりだなあ」

恵一は感慨に耽る。そのときに起きた『とある事件』は、今でも強烈な思い出として彼の脳裏に焼きついていた。

——小学生だった彼が温泉に入っていると、当時女子高生だった杏子が後から入ってきたのだ。

『どう、うちの温泉は？ 特別に貸し切り状態よ。感謝しなさいよね』

『う、うわあつ、杏子姉っ……！』

『何照れてるのよ、子供のくせに』

悪戯っぽく笑う少女の裸身は子ども心にも眩しすぎた。

抜けるような白い肌は水滴に濡れて美しい光沢を放っている。スラリと伸びきった健康的な手足が格好いい。子供相手だと油断しているのか、胸元も股間も特に隠そう

とはしていない。剥き出した。

丸みのある乳房はこんもりと膨らみ、女子高生らしからぬ豊かさと艶気を匂わせていた。真円を描く乳輪とぷっくりとした乳首は淡い桜色だ。

豊かに膨らんだ乳丘から一転して、腰回りはキュッと引き締まって見事なくびれを描いている。若々しくパンと張ったヒップに、どこまでも続いていきそうな見事な脚のラインは息を呑むほど美しく、それでいて妖艶だった。

(見えちゃってるよ、杏子姉っ)

ドギマギしすぎて声が出なかった。

あれから十年近く経つが、未だに従姉の裸身は恵一の網膜に焼きついている。今でも、ふとした瞬間に思い出し、自慰に耽ることすらあるほどだ。

「うう、どこに落としたのかのう」

不意にそんな声が聞こえてきて、恵一は回想を中断させた。

振り向くと、一人の老人が疲れた様子でベンチに座り込んでいる。困り顔でため息をついていた。

(どうしたんだろう)

心配になって、恵一は老人のもとに歩み寄った。

「あの、何かお困りですか？」

「鞆に入れていた切符が見当たらなくてな……」

老人はもう一度ため息をついた。

「電車の中ではあったはずなんですが」

「ホームのどこかに落としたんですかね？ あ、僕、ちよつと見てきましようか」

恵一はすかさず申し出た。

昔からこうだ。困っている人を見ると、どうにも放っておけない。

幸い、バスが来るまで少し時間がありそうだし、探し物を手伝うとするか――。

七階建ての本館と五階建ての別館からなる『むらおや』は、この辺りでは名の知れた老舗旅館だ。

「久しぶりね、恵一。長旅ご苦労さま」

いたるところに金箔が張られた豪華な造りの入り口で、村尾杏子が出迎えてくれた。落ち着いた藍色をした加賀友禅の着物姿がよく似合っている。

しつとりと艶めく黒髪を肩のところで綺麗に切りそろえ、目鼻立ちの整った顔立ち

は凜とした美人だ。体型の出にくい着物だから分かりづらいが、プロポーションも抜群で、すらりとした手足は健康美を備えている。

着物に隠された胸や腰も、きつとあの日見たのと同じか、それ以上に女らしい肉づきに満ちているはずだった。

「ん、どうしたの、ジッと見て？ 私の顔に何かついてる？」

「若女将がすっかり板についてる感じだな、って思ってた」

女将を長年務めていた叔母は、現在は主に別館を担当し、この本館は一年ほど前から彼女が取り仕切っているのだという。実質的に『むらおや』の実務的なトップは彼女と言つてよかつた。

そのせいか、二十七歳にして若女将としての風格を全身から漂わせていて、向き合つてみると圧倒されそうだ。

「ふふ、ここの若女将になって五年が経つもの。少しは貫録もついたでしょ？」

確かに風格を備えているが、悪戯っぽい笑顔は昔のままの杏子だった。その事実にはホッとす。

「じゃあ、さっそくあなたの部屋を案内するわね。『雛菊の間』よ。昔、家族旅行で泊まったわよね。覚えてるかしら？」

「うん、部屋の名前までは覚えてないけど、懐かしいなあ」

そう、杏子と温泉で鉢合わせたのも、その家族旅行のときだ。

「ちようど雛菊が空いていてよかったわ。さ、ついてきて」

笑顔の杏子について、廊下を進む。

「若女将！」

と、そこへ仲居らしき着物姿の女性が駆け寄ってきた。

「旅館の中を走らないでちようだい」

杏子の表情が険しくなった。

「あの、水仙の間のお客様が、頭が痛いと言われて……えっと、頭痛薬をお渡ししたいんですけど、どこにありましたっけ」

「頭痛薬ならフロントにあるでしょ」

「今、フロントに人がいなくて。薬の場所が」

「フロントの奥にある棚の上から二番目の引き出しに入っているわ。ちゃんと把握しておきなさい」

杏子はますます険しい顔になった。

「ほら、早く水仙の間まで行きなさい。お客様を待たせては駄目よ！」

「す、すみませんっ」

年上の仲居は慌てたように去っていく。

「……杏子姉、厳しいんだね」

その様子を一步離れて見ていた恵一は、ふうとため息をついた。

杏子のほうはこともなげな顔で、

「従業員たちの仕事を仕切るのが私の役目だもの。これくらいは当然よ」

「……なんかちよつと雰囲気変わったね」

彼の記憶にある従姉は優しく柔らかな笑みを絶やさないう少女だった。

癒し系という言葉がよく似合う性格だったのだが、こうして再会した彼女はどちらかというとやり手のキャリアアウーマンに通ずる雰囲気がある。

「五年ぶりだもの、私だって変わるわよ。……いろいろあったし」

(いろいろ……か)

その中には、二年前に離婚したことも含まれているのだろうか。

「ふう、いい湯だなあ」

その日の夜、恵一は露天風呂に浸かっていた。周囲に他の客の姿はなく、ほとんど

貸し切りのような状態だ。

空には満天の星と美しい満月が輝き、周囲には緑豊かな森林、眼下には風情のある溪流が広がっている。

『むらおや』自慢のパノラマ夜景の露天風呂だった。

「ああ、極楽極楽〜」

頭に手拭いを乗せ、湯船に肩まで浸かりながら、恵一はつい爺むさい感想をつぶやいてしまった。

がらり、と背後で戸を開く音が聞こえた。

びた、びた、という足音とともに、誰かが近づいてくる。湯煙を通してうっすらと見えるシルエットはスラリとしているながらも、胸や腰回りの凹凸が艶めかしい。

（えっ、嘘!? 女の人が入ってきた……）

心臓の鼓動が一気に跳ね上がった。

グラマスな人影はさらに近づいてくる。もう少し近づけば、肌も露わなその姿を余さず目にすることができるだろう。

この場においていいのか、移動したほうがいいのか。混浴なのだから遠慮する必要はない、と理性では分かっている。感情はそうはいかない。半ばパニック状態だった。

(そういえば、杏子姉がいきなり入ってきたときも、こんな感じだったっけ……)

ふと思いついて、強烈な既視感に襲われる。下腹部にカーッと血が集まってきた。

(もしかしたら、本当に杏子姉が入ってきたりして)

あのころならともかく、お互いに大人になった今では一緒に裸で温泉に入るなど、さすがにあり得ない話だ。

そう思っているのも、童貞ならではの妄想は止まらない。

(で、でも、どういうつもりなんだろう？ 僕だってもう子供じゃないし。あ、でも杏子姉から見たら子供か。いやいや、さすがに僕も大学生だし、杏子姉だって軽々しく裸を晒したりなんか……あ、でも)

悶々とした気持ちとともに、脳裏にはあの日目にした鮮烈なヌード姿がよみがえってくる。

いや、あれから十年経ったのだから、憧れの従姉の裸身はさらに成熟しているはずだ。胸や腰はさらに豊かに、肌はしつとりと滑らかに、そして結婚と離婚を経験した大人の女の色香を全身にまとい……。

彼女はさらに近づいてくる。もうすぐ湯煙を透かして姿が見えるだろう。

早く見たい——！

もはや相手が杏子だと何の根拠もなく決めつけ、もどかしい思いで目を凝らす。

「あれ？ 他に人がいたんだ？ ここっでもしかして混浴？」

そんな声とともに現れたのは、予想に反して杏子ではなかった。

女子大生だろうか、ショートカットの茶髪がよく似合う活発そうな女性だ。

手にしているのは小さな手拭いだけで、とても豊かな裸身のすべてを隠すことなどできない。

片手で押さえた乳房は今にもこぼれんばかり。手拭いで隠した秘所も、濡れた白い布を通して黒い茂みがうつすらと透けて見えていた。

「あつ。アタシの裸、見たでしょ？ エッチ〜」

彼女はムチムチの体を両手で掻き抱いた。

「す、すみません、えっと、つい」

恵一は大慌てで視線を逸らす。くすりと笑うような声が聞こえた。

「ふふ、冗談だつてば。間違えて入ってきたのは、アタシのほうだし。女湯だと思っただけだな」

「ここ、混浴なんですよ」

恵一は説明しながら、チラチラと彼女の豊満な肢体に視線を走らせてしまう。

小さな手拭いで大事なところだけがギリギリ隠れている他は、むっちり肉づきのよい裸体がほぼ剥き出しなのだ。しつとりと濡れて妖しい光沢を放つ艶肌。まろやかなカーブを描く胸の膨らみや腰の括れ、そして丸いお尻。

ジロジロ見るのが失礼だと分かつてはいても、意識するなというほうが無理な話だった。

それに恵一自身も一糸まとわぬ裸なのだ。透明なお湯を透かして裸を見られているかもしれない、と思うと落ち着かなかった。

「アタシは萩原^{はぎわら}里香^{りか}。大学四年で、ここには友達二人と卒業旅行で来たの。ねえ、あなたの名前は？」

一方の里香は全裸に近い姿を晒しているといっても、あつけらかんとした態度だ。スタイルの良さからくる自信なのか、少しくらい見られても構わない、と言わんばかりに、健康的な姿態をくゆらせている。

「村尾恵一……あ、僕は大学一年です」

「あはは、じゃあアタシのほうがお姉さんだ」

里香は天真爛漫という言葉がぴったりの笑みを浮かべた。

「ケイイチくんか。じゃあケイくんって呼ぶね。アタシのことは里香でいいよ」

言うなり里香は湯船の傍にしゃがみこみ、しなやかな手を伸ばしてきた。ちゃぷんと音を立てて、指先から湯の中に入ってくる。

「ううっ」

ほっそりとした指先で胸元をツーツと撫でられた。

(ど、どういうつもり……うわぁ)

突然のボディタッチに恵一は戸惑いを隠せない。

「そういう初心^{うぶ}な反応たまないなぁ、ふふ」

一方の里香はにっこりとした笑顔で彼の反応を楽しんでいるようだった。胸元をくすぐりながら、ゆつくりと指の腹を下に向かって滑らせていく。みぞおちから臍を通り、さらに性器を覆い隠している両手を指でツンと突く。

「アタシだけ見られてるなんて不公平だよ。ケイクンのも見せてよ？　ね？」

「え、でも……」

「何よ、恥ずかしいの？　あ、もしかして見られたことない？　ドーテイ君？」

「そ、それはっ……!!」

驚きと恥ずかしさで絶句する恵一。

その反応に里香は嬉しそうに口元を緩めた。目尻をすうつと下げて、しげしげと恵

一の顔を覗きこむ。

「凶星、だね。君、経験ないんだ？」

「うう……」

「あはは、ごめんごめん。馬鹿にしたわけじゃないよ。むしろ逆。アタシ、童貞の男の子って好きだよ。初心で可愛いし。素直だしね」

ふたたび里香が恵一の胸元を指先でさすった。

「ね、立って。見せてよ。君の立派なモノ」

里香が囁く。

「み、見せるって……」

頭の中がカーッと赤熱化したまま、彼女の言葉をリピートする。戸惑いとドギマギでまともな思考はとづくに機能停止していた。

「ほら、早く」

二度目の囁きが甘い吐息を伴って耳朶に染み込む。

「は、はい……」

ほとんど催眠術にかかったように、恵一は気が付くと湯船から立ち上がっていた。ただし、さすがに恥ずかしいので両手で股間を隠している。

「隠しちゃダメだってば」

里香はにんまりと笑い、恵一の手をどけた。

「あっ」

半ば圧倒されて、抵抗できなかつた。手を完全にどけられてしまうと、充血しきつた若勃起はばね仕掛けのように跳ね上がった。

「うわあ、大きい……!」

さすがに里香も目を丸くしたようだ。

同年代の異性に剥き出しの性器をしげしげと覗きこまれる羞恥で、全身がカーッと燃え上がった。

好奇の視線を痛いほどに意識してしまふ。

意識すればするほど背筋が甘痒くなるような不思議な背徳の快感が込み上げ、ますます充血が強まった。ずきん、ずきん、と腰の芯にまで響くような強烈な血流とともに、恵一の分身器官はフル勃起してしまふ。

「ふふ、たまらないでしょ、それ? よかつたらアタシが鎮めてあげよつか?」

「えっ、鎮めるって——」

「もう、アタシだってそんなの見せられたら、たまらないわよ」

里香の口元に淫蕩な笑みが浮かんだ。

びくん、と屹立した肉棒がひとりでに揺れる。

「で、でも、どうして僕に、こんな……」

「うーん、旅先のアバンチュールってやつ？ 刺激的な思い出っつていいじゃない」

「アバンチュール……」

「それにケイクんって、アタシの好みにぴったりだもん」

里香が爛々と輝く瞳で恵一を見つめる。

あるいは彼女は、今までも旅先でこういうことをした経験があるのかもしれない。

積極的な逆ナン。刹那的なワンナイトラブ。肉食系女子――。

そんなフリーズが脳内に浮かぶ。

「ほら、そういう初心なところ。気に入っちゃった。アタシ、初々しい男の子って好

きだよ。おいで」

「は、はい……」

恵一は理性が麻痺していくのを感じながら、湯船から出た。里香の傍まで行く。

「ケイクんはじつとしてて」

小悪魔女子大生がタイル張りの床に跪いた。

「あ、あの、里香さ——ふわあつ」

何をする気だろう、と息を飲んだところで、里香が突然恵一のペニスを両手で包みこんだ。

濡れた指先で軽く亀頭を握られ、圧迫される。

「ふふ、全部初めてなんだよね？ たっぷりサービスしてあげるね？」

嬉しそうに囁きながら、里香が上体を寄せてきた。

恵一の腰に上半身を乗せるようにすると、両乳房でいきり立った怒張を挟みこむ。

「うあああつ……」

柔らかく弾力たつぷりの膨らみが左右からペニスをサンドイッチにしていた。

（これってパイズリ——）

その行為の名前は知っているが、体験するのは当然初めてだ。量感たつぷりの乳肉を恵一の股間に乗せ、里香はゆっくりと乳房をスライドさせ始めた。

自分の手で擦るのは全く異なる、柔らかみのある摩擦感が肉棒の先端から付け根にまで走り抜けた。

「どう、アタシのパイズリ。この技にはちよつと自信あるんだよ？」

里香がたわわな乳房で恵一のいきり立ったモノを挟み、摩擦を続ける。

上目遣いに見上げる彼女の瞳はうつすらと赤みが差し、艶色を宿していた。生まれて初めて目にする欲情した『牝』の表情だった。

（里香さん、なんてエロいんだらう……!）

乳房の柔らかさや弾力といった感触の心地よさ。

誰が入ってくるかも分からない温泉での行為というスリル。

そして、欲情を露わにした里香のエロチックさ。

それらが相まって、恵一へ肉棒をギンギンに勃起させるほど興奮していた。

「気持ちいい……です。う、ああっ」

答えながら、両乳房の摩擦によってペニスにさらなる快樂が送りこまれ、恵一は言葉の途中で喘いだ。

にゅぷつ、にゅぷつ、と柔らかく潰れながら左右で寄せられ、硬く勃起した肉茎を挟みこむ乳房のフォルムのいやらしさ。

ごくりと喉を鳴らして見下ろしていると、海綿体にますます血潮が集まってくる。

ぱつくりと開いた亀頭の前からヌルヌルのカウパーがとめどなく流れ出す。温泉の水滴に混じって里香の乳肉をしとどに濡らした。

「すごい、先走りがどんどんあふれてくる。アタシのパイズリで気持ちよくなっ

れてる証拠だよな？ 里香、嬉しい」

里香が無邪気に笑った。

（里香さん、可愛い——）

嬉しそうに奉仕してくれる年上の女子大生の艶姿に胸がキュンと疼く。

里香はますます笑みを深め、パイザリのピッチを上げた。

時に速く、かと思えば突然スピードダウンさせ、不規則な緩急を付けつつ、じわじわと童貞ペニスをいたぶってくる。

「うああ、ああっ……くはあ」

男を焦らすことを知り尽くしているような小悪魔じみた性技に、恵一はすっかり翻弄されっぱなしだ。

「ふふ、ケイくんが気持ちよさそうにするから、アタシも興奮してきちゃった。分かる？ 乳首が硬くなってるの？」

「は、はい……」

確かに亀頭に触れる乳首はコリコリとした感触だった。

「女はねエッチな気持ちになると、おっぱいの先っぽがこうなっちゃうんだよ？」

里香は硬くしこった乳首で亀頭を圧迫してきた。

先端にジンと甘い電流が走り抜ける。快樂の増加でぱっくりと開いた鈴口から大量のカウパーが漏れ出した。

「くううっ、里香さ……それ、気持ちい……うああっ」

「あ、オチンチンの先っぽがびくびくしてる……ふふ、もうすぐイクんでしょ？」

里香が乳房と乳房の谷間から顔を出す赤い亀頭を見つめ、余裕たつぷりに笑った。わざと焦らすようにパイズリの速度を落とし、視線を恵一の顔へと移す。

「このままイキたい？ それとも、もっと愉しみたい？」

「ああ、僕……もうっ……ふあ、ああ」

「あはは、童貞くんには酷な質問だね？ いいよ、里香のおっぱいで思いっきりイカせてあげる」

里香の小悪魔的な笑みが天使のような微笑みに変わった。

同時に、乳房の上下動が一気に激しくなる。豊かに実った左右の膨らみがダイナミックにバウンドし、中央に強く寄って扁平に変形する。

摩擦と圧迫、二つの刺激で恵一のペニスを射精へと追い込んでくる。

腰の芯が甘くざわついた。熱いものが精巣から輸精管を通して、亀頭の先へと殺到するのが分かる。

もう駄目だ。もう出したい。

頭の中が射精感で一色に染まった。

「里香さんっ……里香さぁんっ……」

もはや彼女の名前を叫ぶことしかできない。

「いいよ、たっぷりイッて」

里香が浮かべた極上の笑みを見下ろした瞬間、腰の奥で煮えたぎるものがマグマのような勢いで爆発した。ペニスが内側からぱんぱんに膨らみ、先端から猛烈な勢いで白濁のシャワーが噴出する。

縦に割ったメロンのような二つの膨らみの狭間で大量のスペルマが弾けた。

「きゃんっ、熱うい」

里香が嬉しそうに目を細める。

どくっ、どくっ、どくっ、と心地よい脈動とともに濃厚な精液が次から次へと放出され、彼女の胸元を白濁一色に染め上げていく。

さらに噴射の勢いは止まらず、小悪魔女子大生のプルンとした唇や上気した頬にまで飛び散っていく。

「はあっ、はあっ、はあっ」

人生で初めての狭射を遂げた恵一は、荒い息を吐き出した。

蕩けるような放出感と全身の力が抜けるような虚脱感が一体となった、射精後に特有の心地よさだった。

自慰のように自分の手で機械的に発射するのではなく、魅惑的な異性の乳房によって発射したのだという満足感と征服感がミックスされ、頭の中で幸福のドーパミンがあふれている。

（すごい……オナニーとは全然違う。こんなに気持ちいいなんて）

「うわぁ、こんなに出演してくれたんだ。すごい量だね……」

一方の里香も、恵一を見上げながら満足げに微笑んだ。

乳房から顔にまでかかった大量の精液を細い指先で掬い取る。指先から付け根にまで付着した濃い白濁を舌先で舐め取り、笑みを深くした。

「んっ、味も濃いね。やっぱり童貞くんのザーメンって感じ」

「ど、童貞童貞って何度も繰り返さないでください……」

気恥ずかしさと劣等感がない交ぜになり、恵一はか細い声で抗議した。

「あれ、経験がないこと、気にしてるんだ？　そういうところも可愛いなあ。じゃあアタシで童貞卒業してみる？」

里香の口元に今まで以上の淫蕩な笑みが浮かんだ。

濡れたタイトルの床に腰を落とし、Mの字に足を開く。

むちむちの太ももの狭間に黒い恥毛の森が見えた。縮れた陰毛は濡れてべったりと股間に張りついている。

その中から赤く濡れた淫肉が透けて見えていた。ひく、ひく、とわずかに蠢きながら、パツクリ開いたラヴィアの奥が恵一を誘っている――。

(初めてのセックスを……里香さんと、ここで……!!)

想像しただけで、肉茎に大量の血が流れこんだ。

フル勃起したペニスは雄々しく反り返り、臍にくつつかればかりだ。

「あ、すごい。ケイくんも期待してるんだ？　じゃあ、しようよ。里香がケイくんに女を教えてあげるよ？　ね？」

吸い寄せられるように、恵一は里香に近づいた。

M字開脚をしている彼女と正対する形で腰を下ろす。尻で床を擦りながら、ゆつくりと腰を近づけていく。

頭の芯がぼうつと痺れたようになって何も考えられなかった。

彼女の両足の付け根に息づく秘密の園に、視線が釘づけだ。

入りたい。挿れてみたい。

欲情と好奇心がない交ぜになり、理性は完全に麻痺していた。

痛いほど張り詰めた肉刀の切っ先で黒々とした茂みを搔き分け、剥き出しのクレヴ
アスに押し当てる。

小さく窪んだホールに亀頭が吸いつくような感触があった。

ラヴィアはねつとりと濡れていた。あともう少し力を入れれば、このままあっさり
と飲みこまれてしまいそうだ。

(女の人と、初めて——)

ごくりと喉を鳴らした。

ほとんど無意識に腰を突き出そうとしたところで、不意に、脳裏に一人の女性の姿
が浮かんだ。

勝気で凛々しい、年上の従姉の笑顔。

「ま、待って」

亀頭が熱いスリットを搔き分けようとした寸前で、恵一は腰を止める。

「僕やっぱり——」

「どうしたの？ 遠慮しなくてもいいよ」

恵一の制止を遮るように、里香が腰を前に突き出す。柔らかなラヴィアを掻き分け、亀頭が沈み込む――。

――がらっ。

不意に、背後で戸が開く音がした。

「！！」

恵一と里香は同時に体をこわばらせて動きを止める。亀頭の先が里香の膣に入りかけたところで抜けてしまった。

「えっ、誰か来た……？」

「もう、いいところだったのに、邪魔が入るなんて……」

二人で囁き合う。

「へえ、ここが話に聞く『むらおや』の露天風呂か」

「さすがにいい眺めですね」

続いて、がやがやと歓談の音が聞こえてきた。

どうやら数人の客が露天風呂に入りに来たらしい。声からすると中年男たちのようだ。

「……んー。里香、童貞くんは好きだけど、おじさんは好みじゃないの」

「里香さん……?」

「なんだか水差されちゃったね。さすがに何人もお客さんがいるところでエッチするわけにもいかないし……」

「まあ、確かに……」

恵一は里香と顔を見合わせた。

盛り上がっていた気持ちがいったん覚めると、冷静さが戻ってくる。

「アタシ、先上がるね」

「えっ」

「今日はこちらまで。機会があったら続きをしましょ。じゃあね、ケイクン」

驚くほどの変わり身の早さで里香は立ち上がった。恵一の頬にちゅっとキスをしてから、ムチムチの裸身を翻して去っていく。

途中、「おおっ!」とどよめきが聞こえたのは、彼女の裸を目にした中年男たちだろうか。

「な、なんだったんだ……」

恵一は射精後の虚脱感と、あわやのところで童貞喪失を逃した残念さで、呆然と立ち尽くしていた。

翌日、恵一が目を覚ましたのは朝九時近くになってからだだった。昨夜は里香との魅惑的な体験を反芻し、なかなか寝付けなかったのだ。

簡単な朝食をとってから、少し外を散策しようと部屋を出る。

「ちよつと、どういうこと!? どうして誰もいないの!？」

エレベーターに続く廊下を歩いていると、そんな声が聞こえてきた。

「この声……杏子姉?」

ちよつとすぐ前方に従業員の控え室があるようだ。

（大丈夫かな? 本当は客が入っちゃいけないんだけど、僕は身内だし……）
ただならぬ調子の声がどうしても気になった。そつとドアを開ける。

「……恵一?」

振り返った杏子の顔は紅潮していた。

いつも澁刺として凜々しい彼女の顔が、見たこともないほどこわばっている。

「ごめん、勝手に入って……でも、杏子姉の声が聞こえて、ちよつと心配で」

「やだ、外にまで聞こえてたんだ……」

杏子は慌てたように口をつぐんだ。完璧人間の彼女らしからぬミスだった。よほど

動揺していたのだろうか。

「ごめんね。なんでもないわ」

「なんでもないって顔じゃないよ、杏子姉」

憧れの従姉の困惑した顔を見ては、放っておけない。

「僕じゃ何もできないかもしれないけど、人に話すだけでも楽になるかもしれないし

……」

「逃げたみたいなの」

ため息をつく杏子。

「うちの仲居たち。集団で仕事を休んで……ボイコットしたみたい」

「ボイコット!?!」

恵一は思わず素っ頓狂な声で叫んだ。

「お待たせしました！ お荷物お運びしますっ」

家族連れの宿泊客が持ってきたスーツケース二つを、恵一はてきぱきと運んでいく。

「ねえねえ、お庭があんなに広いよー」

「ふふ、後で一緒に歩きましょうか」

「じゃあ、パパとママと皆で歩く」

嬉しそうにはしゃぐ子供の笑顔や幸せそうな家族の雰囲気を見ると、こちらまで癒されるようだ。

フロントに戻ったところで、すぐに次の宿泊客が来ていた。今度は若いカップルだ。荷物を持って、予約の部屋まで案内する。

「こちら、鳳仙花の間になります、御用の際にはフロントまでお申し付けくださいませ！」

フロントまで戻ると、また次の客が――。

（ひええ、旅館の仕事ってこんなに忙しいんだ）
まさしく目が回る忙しさだ。

――この発端は、『むらおや』の仲居たちが、杏子の躰しつけの厳しさに音をあげ、集団ボイコットしたことだった。

名目上はいっせいに有給休暇を出した形だが、事実上の仕事放棄だ。

話によると、前々から杏子と一部の古参仲居たちの間で反目が続いていたらしい。

大女将に比べてまだ年若い彼女を認めないというスタンスで、特に最古参の仲居頭が気の強い性格の杏子とそりが合わなかった。そして、仲居頭は自分と仲のいい仲居

たちと結託してボイコットしたという。

ただでさえ繁忙期だというのに、仲居が三分の一近く抜けたのだ。仕事回るはずもない。

見かねた恵一は慣れない旅館の仕事ながらも、臨時の従業員として手伝うことにしたのだった。

この仕事は初めてだが、接客自体はアルバイトで経験している。とにかく不慣れな部分は元気でカバーとばかりに、恵一は動き回った。人手が足りないのだから、一番若い自分が動き回らなければ話にならない。

もちろんサービス業の常として、いいことばかりではなかった。中には嫌味な客だっている。

「元氣いいねえ、君」

その日、何組目かの客。重役らしき初老の男がねめつけるように恵一を見やる。

「あ、はい。ありがとうございます」

「でも、どうせなら可愛い女の子の仲居のほうがよかったな、ぼかあ」

「まったくですね、専務」

専務に部下が追従ついでの愛想笑いを浮かべる。

旅館の入り口に『カネサダ株式会社ご一行様』という札があったことを思い出す。どうやら会社の慰安旅行で来た一行のようだ。

「あ、はあ……」

「まあ、いい。飲み会の際にでも、仲居にお酌をさせるか。ここはお触りありかな、んん？」

いかにもスケベオヤジそうな表情を浮かべ、相好を崩す。

（お触りって……仲居さんはそういうことはしなないと思うけど）

「ん、まだいたのか、君。もういいぞ、行った行った」

しっしっしと追い払うような手の動き。立場が下の人間には傲岸になるタイプのようにだった。

「……失礼します」

内心でカチンときつつ、表情だけはあくまでも笑顔で恵一は退室したのだった。

「申し訳ありません。これは若女将である私の責任です」

「いつまで経っても料理がそろわないわ、カラオケの機材は故障して歌えないわ……会社の慰安旅行がこれじゃ台無しじゃないか！」

初老の男は酔いも手伝つてか、かなり立腹しているようだ。酒臭い息を吐きかけながら、杏子に絡んでいる。

——その日の夜、騒ぎを聞いて宴会の間に駆けつけた恵一が見たのが、この光景だつた。

（あ、さっきの会社だ）

杏子にネチネチと絡んでいるのは専務と呼ばれていた男だ。

最大で百名まで入れる宴会場『花泉』に、専務の嫌味が響く。

「こんなことじゃ毎年の慰安旅行も別の旅館にしたほうがよさそうだねえ」

「も、申し訳ありません」

「毎年この旅館を鼻^{ひいき}根^ねにしていたのにこんな仕打ちをされるなんてねえ」

「申し訳ありません」

執拗に文句を言い続ける専務はクレーマーそのものだった。

謝り続けている杏子の背中がやけに小さく見える。

若女将として旅館の責任をすべて一人で背負いこんでいるような背中。

（僕が——杏子姉の力にならなきゃ！）

そう思いながらも、この窮地を救う手だてを思いつかない。

「あーあ、盛り下がっちゃったなあ」

(盛り下げたのはあんただろ)

内心で苛立ちの言葉を吐いたそのとき、重役は信じられない一言を口にした。

「ふん、どうせなら場を盛り上げるために、あんたが裸踊りでもしたらどうかねえ」

「なっ……!!」

さすがに杏子も顔色を変えた。凜とした美貌は血の気が引いて真っ青だ。

「若くて美人の女将さんの裸踊りなら男性社員も大喜びだろうさ」

げらげらと下品に笑う専務。

(こいつっ……!!)

いくらなんでも侮辱が過ぎる。

さすがに我慢できなくなり、恵一が前へ出ようとする。

「……私が裸踊りをすれば、許してくださいますか」

杏子がキツとした顔で専務を見据えた。

「杏子姉っ!!」

恵一は悲鳴を上げた。

彼女の目は本気だ。

旅館の不手際は若女将の不手際。そのミスは自分の責任で、どんなことをしてでも挽回する——杏子の瞳がそう語っていた。

「ま、待つてください！ 僕が代わりにやりますっ」

恵一は意を決して前に出た。

憧れの従姉に裸踊りなんてさせるわけにはいかない。自分が恥をかくことで彼女を救うことができるなら、恥なんていくらでもかいてやる。

「なんだ、小僧。さてはお前、この女将さんにホの字か？ あん？」

重役はどこまでも絡み酒だ。

(ホの字って……完全に死語だよね)

などと場違いな感想を漏らしてしまう。

「男の裸なんて見ても、面白いわけがないだろう」

「そ、それは、まあ」

「やっぱり、こっちの美人女将さんに脱いでもらわんとなあ」

「……いやらしい目で杏子姉を見るのはやめてください」

さすがにムツとして専務を睨み付ける恵一。

「なんだと、小僧」

相手も苛立ちを露わに睨み返してくる。

「我が社の専務ともあろう者が、なんと品のない」

不意に呆れたような声が聞こえた。

宴会の間の入り口に小柄な影が見える。スーツ姿の老人だ。

「あれ、あの人は——」

見覚えがあった。確か笹蔵温泉駅で出会った老人だ。

切符をなくして困っていたのを見かねて、助けてあげた。結局、ベンチの下に落ちているのを見つけて渡してあげると、たいそう感謝されたものだ。

「な、なんでここに……」

一方の重役の顔からは見事なまでに血の気が引いていた。全身が震えている。

「か、会長っ!! 来てらしたのですかっ」

(会長?)

恵一は驚いて老人を見やる。

「さつきからおったわい。こちらの宿に随分と無体なことを言っておったのう、宮^{みや}

口^{ぐち}」

「そ、そ、それは」

「申し訳ありません。私どもの不手際でご不快な思いをさせてしまったんです
すかさずといった感じで杏子が前に出る。

「その件でお叱りを受けていたところでして」

相手が嫌な奴であつても、いたずらに面目を潰すことなく、自分たちが一步引く。
如才ない立ち回りだった。

「……ふむ。だが、少々行きすぎの感はあるな。私の顔に免じて許していただけない
か」

「とんでもございません、会長」

深々と頭を下げる杏子。

「わ、私も異存ありません……」

専務の宮口も青白い顔で自席に戻った。矛を収めてくれたようだ。

老人はにっこりと微笑み、それから恵一に視線を向ける。

「一生懸命で中々好感が持てる青年じゃないか。うん、多少の失敗など気にせず、こ
れからも頑張りなさい」

言つて、小さくウインクをした。

駅で助けてくれたお礼だとしても言わんばかりに――。

「ふう、今日は疲れたなあ」

恵一は部屋に戻ると、床の上で大の字になって転がった。

『むらおや』の従業員は実家が近い者は通勤し、その他は旅館近くの寮に住んでいるのがほとんどだ。

が、恵一に関しては臨時の従業員として働いているものの、宿泊客でもあるため、引き続きこの雛菊の間に寝泊まりしている。

寝転がったまま気怠い疲れに浸っていると、戸口が軽くノックされた。

「……ちよつといいかしら、恵一」

扉の向こうから杏子の声が聞こえる。

「あ、どうぞ」

恵一は立ち上がってドアを開けた。

着物姿の杏子がそこには立っていた。

「ごめんね、こんな時間に」

軽く頭を下げる。わずかに湿り気を帯びた黒髪から、ふわりと清潔な匂いが漂ってきた。

(杏子姉、いい匂いがする)

大人の女性のフレグランスに胸が甘酸っぱく疼く。

「汗かいちちゃって、軽く流してきたの」

「汗？」

「あのトラブルで冷や汗が……」

ばつが悪そうにつぶやく杏子。

恵一は意外な思いで従姉を見た。

「冷や汗かいてたんだ？ 冷静に対処してるように見えたけど」

「まさか。お得意様を失うんじゃないかと思って冷や冷やしてたわよ」

「あの杏子姉でもそんなことあるんだね」

あはは、と笑うと、杏子は少し寂しげな表情を浮かべた。

「私……恵一が思ってるほど強い女じゃないよ」

「杏子姉……」

いつも勝気な彼女のこんな表情は初めて見る。恵一が知らないところでは、色々と苦労もあったのかもしれない。二年前に夫の浮気が原因で離婚したり、若女将として奮闘したり、もしかしたら他にも――。

「あ、えっとここに来たのは、恵一にお礼がしたくて。さっきかばってくれたでしょ。嬉しかったよ」

杏子が誤魔化すように笑った。

「私に何かできること、ないかな？」

「いいよ、お礼なんて」

「駄目。私の気が済まないもの」

杏子が詰め寄る。

また黒髪から清潔な香りが漂ってきた。

藍色の着物の襟からは白いうなじが見えている。ほつれ毛が一本張りつき、やけに艶めかしかった。

（杏子姉、大人の女って感じがする）

どきんと胸が高鳴り、ますます彼女のうなじに視線を引き寄せられてしまう。

女子高生のころの杏子も十分色っぽかったが、今の彼女の色香はそれとは別物だ。

子供のころに目にした従姉の裸身を、つい連想する。

まるで開花寸前の花のつぼみを思わせるヌードと、今現在の従姉の姿が脳裏で重なっていく――。

「ねえ……エッチなこと考えてるでしょ」

不意に杏子が一瞬口ごもりつつ、そこを指差した。

ハツとして視線を下ろすと、ズボンの股間が大きくテントを張っている。杏子のヌードを思い浮かべてしまっただけで、こんなにも下が充血してしまったのだ。

「ご、ごめん、つい……」

恵一はばつの悪い思いで頭をかく。

「恵一も男の子だもんね。いつまでも子供じゃないよね」

杏子は苦笑交じりにつぶやいた。

「う、うるさいな。だって杏子姉、すごく色っぽくなってるし、子供のころのことを思い出したりして……」

「子供のころ？　もしかして一緒にお風呂入ったこと？　恵一、意識してくれてたんだ」

「し、しょうがないじゃないか！」

「あはは、ごめんごめん。からかうつもりはないのよ。ふーん、そっか……私の裸、エッチな気持ちで思い出してたんだ？」

杏子は悪戯っぽく笑うと、不意に真顔に戻った。

「じゃあ、こういうお礼はどうかかな？ 私、こんなことしかできないけど——」
遠慮がちに手を伸ばしてきた。

「う、ああっ……!!」

えっと思つたときには、しなやかな指先で股間を優しく撫でられていた。

「くうう、うう」

ソフトタッチの刺激が若い肉茎に絶妙の圧力をかける。

ゆつくりと円を描くように、杏子の指が布地の上から張り詰めた剛棒を撫でさすつてくる。

「すごいわ、こんなに硬く……子供のころとは全然違うのね」

杏子は可憐に頬を染めてつぶやいた。

布地越しにも勃起した十代の肉塊の硬度は十分に感じ取れるのだろう。指先がかすかに震えている。

「ねえ、直接触ったら……ダメかな？」

上目遣いで見上げてくる従姉の顔は湯上がりのせいなのか、あるいは興奮を高まらせているのか、艶めかしく上気していた。

わずかに開いた桃色の唇の隙間から悩ましげな息が漏れる。

初めて目にする、憧れの従姉の『女』としての顔。

恵一が知らない杏子の顔――。

「う、うん、いいよ……」

興奮と欲情で声を上ずらせながら、恵一は小さくうなずいた。

（まさか、杏子姉にこんなことしてもらえるなんて）

艶やかな着物姿の杏子が彼の足元に跪いている。仕事着である法被やズボンを脱いで全裸になった恵一の剥き出しの肉棒を握り、両手で扱っていた。憧れの従姉に手コキ奉仕されている光景を見下ろし、恵一は夢見心地だった。

「くううつ」

しなやかな指先が敏感な亀頭に絡み、肉棒の先端から付け根に向かって鮮烈な電流が走り抜けた。

甘い愉悦の電気信号となって腰の芯を心地よく震わせる。

「う、ああ」

「あ、痛かった？ 久しぶりで力加減が分からなくて、ごめんね」

健気に謝る従姉に、恵一は大丈夫だというふうに首を振った。

「ううん、あんまり気持ちよかったから、声出ちゃった……」

「ふふ、まだちよつと触っただけだよ？」

「だって杏子姉にチンポ触ってもらってると思うと、興奮が抑えられなくて」

恵一が熱っぽい息を漏らす。

杏子は悪戯っぽい笑みを浮かべて、指先で亀頭の丸みを軽く撫でた。

「そうね。私もなんだかいけないことしてるような気持ちになってきちゃった。子供

だと思ってた恵一も、いつの間にか大人の男になっていたのね」

しなやかな指先が亀頭のカーブに沿って巻きつき、絶妙の加減で締めつける。指の

腹で敏感な鈴口をコリコリと擦られる。

「くっ……あああ……！」

痺れるような快感がペニスの芯を螺旋状に突き抜けた。

「気持ちいい？ 私の指で気持ちよくなってくれてるの、恵一？」

「だって、杏子姉……上手すぎ……くうっ」

「ふふ、恵一の気持ちいいところ、どこかな？ ここかな？」

杏子は彼の反応を愉しむように指先の位置を亀頭から竿をたどり、付け根にまで少しずつスライドさせていく。

指の腹で加えられる絶妙の圧力。しなやかな指が巻きつき、撫でられる摩擦感。それらが渾然一体となり、若い男根に存在する無数の性感を片っ端から引き出ししていく。

「うああっ、そ、そこ、気持ちよすぎっ……」

中でも亀頭周辺への指遣いは絶品といってよかった。

生真面目な従姉が備える意外なほど巧みなテクニクに、童貞の恵一は圧倒されっぱなしだ。

柔らかな両手の中で逞しい肉塊がびくんびくんと跳ねた。

先端から漏れるカウパーはさらに量を増し、杏子の指先から手のひらに至るまでをヌルヌルに濡らしている。

「すぐくっついて出てきたね。私の手でそんなに感じてくれてるんだ？」

「だ、だって、杏子姉……上手すぎて……くうううっ」

「うふふ、私を助けてくれたお礼だもの。もっともっと気持ちよくなってね？」

杏子の指先が妖しく踊り、蛇のようにくねりながら先端や竿に巻きついてきた。

反応を探るように恵一の顔を覗きこみながら、指先の圧迫に緩急をつけてくる。

気持ちいいと思った瞬間には、そこを強く押され、擦られ、さらなる快感を引き出

される。

「すぐくいい、よ……杏子姉……ああ、たまらない……うかう」

「そんなに喜んでくれるなんて。じゃあ、もつとサービスしてあげる」

言って、杏子はペニスから手を離した。

（えっ、終わりなの——）

一瞬、落胆した恵一に対し、杏子は微笑を浮かべる。

頭を段々に下げていき、恵一の股間に顔を埋めた。

「んぐううっ」

甘やかな吐息にペニスの先端をくすぐられたかと思うと、熱い口腔内に龟头が飲みこまれていった。

手コキしてもらえただけでも夢のような出来事なのに、初恋の従姉は恵一の肉棒を口に啜えてくれたのだ。

（こ、これがフェラチオ……！ 杏子姉が、僕につ……！）

「ん、ちゅ……んぐう……」

小さな喘ぎ声を織り交ぜながら、杏子の頭がリズムカルに上下動する。

温かな口腔に包まれたペニスに摩擦刺激が加わった。甘痒い快感が肉棒の先端から

付け根にまで満遍なく染み渡る。

「うぐ、くああ……」

まともな言葉を発する余裕はなかった。断続的な呻きを漏らすことでしか快感を表現できない。

熱い舌が亀頭の丸みに沿ってねっとり巻きついてくる。

ギョツと圧搾されると、肉棒の中心部に甘美な稲妻が走り抜けた。

「く、ああっ……そ、そんなにしたら……もうっ」

童貞の少年にとって生まれて初めてのフェラチオは刺激が強すぎた。

ヌルヌルとした口腔による摩擦。温かな舌による圧迫。甘い吐息を吹きかけられるくすぐったさ。

そして何よりも大好きな女性が自分の一番恥ずかしい場所を舐め、しゃぶり、愛撫してくれているという光景が五感を甘美な感応に浸していく。

「はあっ、はあっ、き、杏子姉っ……くはあ」

興奮が際限なく高まっていく。

眼下には、頬を窄め、唇を突き出し、エロチックな表情で己のペニスを啜える憧れの女性の姿がある。

その姿が網膜に焼きつくたび、背筋がジンジンと痺れる。

幾度も夢見て、妄想して——だけど、いざ実現してみると、想像をはるかに超えた
愉悦と快美で、あまりにも現実感がなかった。

まるで桃源郷をさ迷っているようだ。

だが一方で、ペニスを幾重にも走り抜ける快楽の電流も、下肢全体が痺れるような
性悦も、すべてが生々しいほどの現実感を伴っている。

(本当に、あの杏子姉にフェラしてもらってるんだ……)

あらためて湧き上がる実感が、肉棒を浸す愉悦をさらに増幅させた。

「んちゅ、ん、ふ……恵一の、口の中で……びくん、つて……んっ」

口内で元気に跳ねるペニスを、杏子は目を細めて啣え直す。

舌先が踊り、鈴口をこじり開けた。トロトロにあふれてくる我慢汁を掬っては嚙下えんげ
し、さらに肉エラや竿にまで甘い舌を這わせていく。

先端から付け根にまで、初めて味わう甘く熱い快感が間断なく込み上げた。

視覚と触覚の両方で鮮烈な刺激に満たされ、みるみるうちに射精感がボルテージを
高めていった。

もう、我慢できない。

いや、我慢したくない。思いつきり出したい――。

「杏子ね、え……ぼ、僕うっ……うあああ」

「いいのよ……着物にかけると大変……だから……私の口、んっ……いっばい、出し……ちゅう」

上目遣いに見上げる杏子の瞳が口内への射精を誘っていた。

（えっ、本当にこのまま口の中に出していいの!?!）

美しい従姉の口内に思うさま精を放つ――。

それは童貞の彼にとって抗いがたい甘美な誘惑だった。

「うあああ、出るっ……!!」

かすれた声を上げて、恵一は腰を小刻みに震わせた。

頂点に達した肉茎が激しく痙攣する。甘美な絶頂感が背筋から脳髓に向かって駆け上がった。

同時に、熱くたぎった欲情が亀頭の先から一気に放出される。

どくどくどくっ、と若さあふれる脈動とともに、大量のザーメンが温かな口内に放出された。

「んんんっ……」

予想をはるかに超える量の放精に驚いたのか、美貌の従姉は目を丸くして喘いだ。それでもペニスを口から離さない。恵一が注ぎこむ大量のザーメンを口の中でしっかりと受け止めてくれる。

「ふわあぁっ、まだ出るうっ……!!」

生まれて初めて異性の口中で絶頂した恵一は、夢見心地の射精を続けた。

長い放出を終えて、ようやく力を失った肉茎を熱い口中から抜き取る。

が、あれだけ大量に出したというのに、恵一の分身はほとんど萎えていなかった。

唾液と精液でドロドロに濡れた砲身は最大サイズを維持し、高角度に屹立したまま。今すぐにでも、二度目の放出を行えそうなほど漲っていた。

「すごい、まだこんなに……」

頬を赤らめた杏子が恵一のペニスを見つめている。

熱い視線を感じ、肉棒が自然にビクンと跳ねた。

潤んだ瞳に欲情の色が灯っている――。

そう感じ取った恵一は震える手を憧れの従姉に伸ばした。

「あ……」

着物の襟から覗く真っ白な首筋にそつと触れる。

熱い。杏子の肌が火照っていた。

「き、杏子姉っ……!!」

慕情と欲情が混じり合い、恵一の中で煮えたぎった。たまらなくなつて彼女の体を押し倒す。

「恵一……!!」

見上げる杏子の瞳はやはり潤んでいる。

「続き……しよつか？」

つぶやいた杏子の顔は真剣だった。

「私で……いい、恵一？ 初めてなんだよね」

「うん、僕……ずつと杏子姉とこうなりたいって思ってた」

ずつと好きだったから——続けて告げようとしたその言葉は、すんでのところで飲みこむ。

告白する勇氣は持てなかった。だけど、せめて行動で示したかった。

自分の、熱情を。

「杏子姉、僕の初めての相手になつてっ……!!」

かすれた声でつぶやく。

「……じゃあ、準備をするからちよつと待ってね」

言って、杏子は立ち上がった。

するりと帯を解き、着物を脱いでいく。襦袢姿になると、その場に腰を下ろした。裾を割って艶めかしい美脚が覗き見える。

「いいよ、来て——」

杏子に促され、恵一は彼女にのしかかった。

むっちりとした肉のついた太ももを左右に割り開く。黒々とした陰毛は綺麗に処理されて整っていた。いかにも几帳面な杏子らしい秘所だった。

そして秘毛の森を透かして、サーモンピンクの美しいラヴィアが仄見える。

「これが、杏子姉の——」

混浴露天風呂で里香のソコを見たことはあったが、相手が憧れの従姉となれば、感慨はひとしおだ。

「あんまりじっくり見ないで……恥ずかしい」

勝気な杏子にしては珍しく弱々しい声で懇願した。

（とうとう杏子姉とセックスするんだ……あの杏子姉と）

込み上げる感慨が強すぎて、彼女の秘所から目を逸らすことができない。

「ねえ、恵一つてば。それ以上、見ちゃ嫌……来て」

「う、うん」

杏子に再度促され、恵一はハッと我に返った。

M字開脚した杏子の足の間に腰を進める。

互いの股間が触れあわんばかりの至近距離。すぐ間近には顔を上気させた杏子が息づいている。興奮と緊張で心臓が破れそうだ。

「杏子姉っ……!!」

上ずった声で憧れの従姉の名を呼ぶと、破裂しそうなほど張り詰めた肉砲の先端部を杏子の股間の中心部に押し当てた。

亀頭で軽く陰毛の森を掻き分け、熱いラヴィアの合わせ目に押し当てる。

(いよいよ挿れるんだ)

恵一の興奮は最高潮に高まった。グッと腰を押し進める。

亀頭が熱い膣肉に包まれる――。

かと思いきや、肉の切っ先は空しく花卉の表面を滑っていった。

「あ、あれ……?」

戸惑いの声を上げる。AVなどでは苦もなく挿入しているように思えるが、いざ自分でインサートしようとするとな手く照準を合わせられない。

予想外の難易度に恵一は混乱してしまふ。

(落ち着け。落ち着くんだけ、僕……)

自分自身に発破をかける。

「大丈夫だよ。慌てないで、恵一」

従姉の声がまるで救いの女神のように聞こえた。

「あ……」

杏子の指先が優しくペニスを撫でさする。柔らかな両掌が優しく竿を包みこんだ。

杏子にゆつくりと導かれ、亀頭が熱い窪みにあてがわれた。

「あ……」

柔らかな花卉が肉棒の先端部にぴったりと吸いついてくる。

「ここが入り口よ、恵一」

杏子が微笑みを浮かべていた。

「来て——」

妖しく誘われ、ごくりと喉を鳴らす。

「う、うん。行くよ……!」

従姉に小さくうなずき、恵一は緊張しながら腰を前に押し進めた。

亀頭に強い圧力がかかり、それを押しつけてさらに進む。ずぶり、と二枚のラヴィアを押し開く感触とともに、先端部が熱い粘膜に包まれた。

「う、ああっ」

これが杏子姉の中——感慨に耽るよりも、興奮が勝った。

恵一は腰に全体重を込めて、どんどん突き進んでいく。

四方から迫り、ねっとり絡みついてくる粘膜を、男根の切っ先で掻き分けていく抵抗感がたまらなく心地いい。

想像以上に狭苦しい腔洞は強い圧力で竿を食い締めてくる。

女の体の中に侵入している、という実感があつた。腰の力をすべて解放し、一気に根元まで突き入れる。

「んっ」

奥に当たる感触とともに、杏子が豊かな下腹部を突き出すようにして震えた。

「入ってる……!」

恵一は結合部を見下ろして感慨の吐息をついた。

従姉の膣肉を押し広げた。ペニスは根元まで深々と差しこまれている。

生まれて初めて侵入した女性の胎内は驚くほど熱く、肉棒全体に甘い火照りが伝わってきた。

「恵一の童貞、貫っちゃったね」

杏子が悪戯っぽい笑顔で彼を見上げている。

小悪魔じみた微笑を見つめていると、高まる慕情で胸が詰まりそうになった。

「う、動くよっ」

静止しているのが耐えられず、恵一は滾る熱情をすべてぶつけるように腰をがむしやりに動かし始めた。

技巧も何も無い、童貞丸出しのぎこちない律動。

「んっ、激しい——」

恵一の情熱的な腰遣いに、杏子は嬉しそうに目を細めた。

ブリッジの要領で自ら腰を浮かせ、ガツガツとぶつけてくる若い腰遣いをクツション代わりに受け止めてくれる。

膣内がうねうねと蠢き、剥き身の肉棒をまさぐってきた。

「うあああつ、す、すごいっ……!!」



「もっともっと……はあ、ああっ……き、気持ちよくなって、恵一……ふあ、んっ」
囁きながら、杏子自身も甘い吐息をこぼす。

恵一は愛しい従姉と腰をぶつけ合いながら、高まっていった。

深々と差しこむたびに、甘い電流が肉茎の芯を流れ、尾てい骨にまで響き渡る。

自慰とはまるで違う。違いすぎる。

これが本物のセックス——。

恵一は未知の愉悦と感動に震えながらスラストを叩きつけた。技巧も何もない、無我夢中の腰遣いだった。

「き、杏子姉っ……僕、もうっ……もう、だめだあっ……」

高まり続ける快感に、恵一は悲鳴のような声を上げた。

「もうイキそう……なのねっ……？ はあ、はあ、いいのよ、出して……！」

杏子もまた興奮を高まらせているのか、声を上ずらせて叫んだ。

心の片隅で、中出しなんていいのか、と理性が叫ぶ。

ただそれ以上に、大好きな従姉の内部に思いつき自分の慕情の丈を吐き出した
いという欲求が込み上げていた。

「うん、このまま、僕っ……！」

途切れ途切れに叫びながら、恵一はさらに腰の動きを加速させる。

杏子の狭苦しい膣の中で、摩擦快感を浴び続ける。ペニスが際限なく高まっていく。腰の芯がズキンズキンと疼きつばなした。

出したい。吐き出したい。

脳髓が焼けつくような本能的な衝動に支配され、恵一は深々と腰を叩きこんだ。杏子の最奥にありつただけの熱い白濁を注ぎこむ。

「うあああつ、どんどん出るうっ！」

生まれて初めての、女性の胎内で遂げる放精。

腰の奥が蕩け、精巢内のスペルマが一滴残らず迸っていく。

熱い肉壺の中でペニスが溶けてしまったような快感で意識が真っ白になった。

「やああつ!! すごい、なんて熱い——」

杏子もまた膣いっぱい恵一の射精を感じ取っているようだ。

グラマラスな肢体を喜びに震わせながら喘ぐ。

互いの嬌声を絡め、信じられないほど長い射精が続く。

やがて一度目以上の長い長い射精を終えて、恵一はようやく息をついた。

「ご、ごめん、あんまり気持ちよくて……その、大丈夫なの？」

頭の中が赤熱化したような興奮からゆっくりと覚めていき、自分が杏子の中に避妊もせずに発射してしまったことを自覚する。

「中に、出しちゃったけど……」

「心配しないで。今日は安全な日だから」

杏子がにっこりと微笑む。

慈愛に満ちた笑顔が恵一の心を多幸福感で包み、溶かしていった。

「せっかくの童貞卒業だもの。恵一にとって素敵な思い出になればそれでいいの」

「うん、最高の初体験だった。ありがとう、杏子姉……」

恵一はうつとりとした気持ちで顔を寄せていく。

杏子は軽く目を閉じると、恵一にとって生まれて初めてのキスを柔らかな唇で受け止めてくれた。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>